

こくぶんけんトーク

『無門関』の不思議な成功物語

前半

ダヴァン・ディディエ

2022年10月1日



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国文学研究資料館

禅籍の種類：語録と公案

語録の基本特徴

語録

一人の禅師の言動を記録したテキスト。

唐代では禅僧の思想が現れるが、宋以降形式かして特殊性は激減する。
後代に引用されている語録は圧倒的に唐代の物である。



馬祖道一 (709–788)



趙州從諗 (778–897)

『馬祖道一禪師廣録』

大梅山法常禪師。初參祖。問。如何是佛。
祖云。即心是佛。常即大悟。後居大梅山。
祖聞師住山。乃令一僧到問云。和尚見馬
師。得箇什麼。便住此山。常云。馬師向
我道。即心是佛。我便向這裏住。僧云。
馬師近日佛法又別。常云。作麼生別。僧
云。近日又道。非心非佛。常云。這老漢
惑亂人。未有了日。任汝非心非佛。我只
管即心即佛。其僧回舉似祖。祖云。梅子
熟也。

『趙州和尚語録』

「師上堂謂眾曰。『此事的。沒量大人
出這裏不得。老僧到潯山。僧問。『如何
是祖師西來意？』』」
「若宗師。須以本分事接人。始
得。』」
「時有僧問。『如何是祖師西來
意？』」
「師云。『庭前柏樹子。』」
「學云。『和尚莫將境示人。』」
「師云。『我不將境
示人。』」
「云。『如何是祖師西來意？』」
「師云。『庭前柏樹子。』」
「又云。『老僧九
十年前。見馬祖大師。下八十餘員善知識。箇
箇俱是作家。不似如今。知識枝蔓上生枝蔓。
都大是去聖遙遠。一代不如一代。』」
「如南
泉尋常道。『須向異類中行。』」
「且作麼生
會？如今黃口小兒。向十字街頭說葛藤。博
飯噏。覓禮拜。聚三五百眾。云。『我是
善知識。你是學人。』」



『A和尚語録』



『B禅師語録』



『C語録』

禅籍の種類：語録と公案

公案の登場

公案

語録（主に）に登場するエピソードを短くまとめた物。

一人の禅僧の言動よりも、人場面の問答、行動などの記録である。



馬祖道一 (709–788)

『馬祖道一禪師廣録』



趙州從諗 (778–897)

『趙州和尚語録』

大梅山法常禪師。初參祖。問。如何是佛。
祖云。即心是佛。常即大悟。後居大梅山。
祖聞師住山。乃令一僧到問云。和尚見馬
師。得箇什麼。便住此山。常云。馬師向
我道。即心是佛。我便向這裏住。僧云。
馬師近日佛法又別。常云。作麼生別。僧
云。近日又道。非心非佛。常云。這老漢
惑亂人。未有了日。任汝非心非佛。我只
管即心即佛。其僧回舉似祖。祖云。梅子
熟也。

「師上堂謂眾曰。『此事的。沒量大人
出這裏不得。老僧到潯山。僧問。『如何
是祖師西來意？』』」
「若宗師。須以本分事接人。始
得。』」
「時有僧問。『如何是祖師西來
意？』」
「師云。『庭前柏樹子。』」
「學云。『和尚莫將境示人。』」
「師云。『我不將境
示人。』」
「云。『如何是祖師西來意？』」
「師云。『庭前柏樹子。』」
「又云。『老僧九
十年前見馬祖大師下八十餘員善知識。箇
箇俱是作家。不似如今知識。枝蔓上生枝蔓。
都大是去聖遙遠。一代不如一代。只如南
泉尋常道。『須向異類中行。』』」
「且作麼生
會？如今黃口小兒。向十字街頭說葛藤。博
飯噏。覓禮拜。聚三五百眾。云。『我是
善知識。你是學人。』」

公案

等々

・ C 和尚云：Z Z Z

・ B 禪師云：Y Y Y

・ A 和尚云：X X X

・ 時有僧問：「如何是祖師西來意？」師云：「庭前柏樹子。」

・ 大梅山法常禪師。初參祖。問。如何是佛。祖云。即心是佛。



『A和尚語録』



『B禪師語録』



『C語録』

公案禅の二面：看話禅と文字禅

1－看話禅

看話禅（かなんぜん）

理性を使わずに公案に集中して、言語的な意味を越えた意味に達する事によって悟りを開く方法。

問。 福智を求むるをば、ことごとくこれを嫌へるに、
禪家の学者、一則の公案を提撕して、悟りを求むるは苦
しからずや。

答。 古人云はく、心を以て悟りを求むることなかれと
云云。学者もし悟りを求むる心あらば、公案を提撕する
人にあらず。圓悟禪師云はく、もしこれ利根種姓の人は、
必ずしも古人の言句公案を看るべからずと云云。これを
以て知りぬ。公案を与ふるも、宗師の本意に非ざることを。
たとひ慈を垂れて、一則の公案を与ふといへども、
仏の名号を唱へて、往生を求め、咒を誦し経を讀みて、
功德を求むるには同じからず。その故は、宗師の人にこ
の公案を与ふること、往生浄土のためにもあらず、成仏
得道の求めにもあらず。世間の奇特にも非ず。法門の義
理にも非ず。惣て情識のはからざる處なり。故に公案と
名づく。これを鐵饅頭に譬へたり。ただ、情識の舌をつ
くることあたはざる處に向かつて、咬み来り嚼み去らば、
必ず咬み破る時分あるべし。その時始めて、この鐵饅頭
は、世間の五味・六味にも非ず。出世の法味・義味にも
非ざることを知るべし。

文字禅（もんじぜん）
公案に対しての見解などを文字（韻文か散文）で表現する。



雪竇重顕（980-1052）

『雪竇頌古』

百則の公案＋雪竇が付した頌古（≈漢詩）



圓悟克勤（1063-1135）

『碧巖録』

『雪竇頌古』＋圓悟克勤の「垂示」、「著語」、「評唱」

垂示云。隔山見煙。早知是火。隔牆見角。便知是牛。舉一明三。目機銖兩。是衲僧家尋常茶飯。至於截斷眾流。東湧西沒。逆順縱橫。與奪自在。正當恁麼時。且道。是什麼人行履處。看取雪竇葛藤。

舉梁武帝問達磨大師（說這不唧壁漢）如何是聖諦第一義（是甚繫驢轡）磨云。廓然無聖（將謂多少奇特。箭過新羅。可殺明白）帝曰。對朕者誰（滿面慚惶。強惺惺果然。摸索不着）磨云。不識。咄。再來不直半文錢（帝不契（可惜許。却較些子）達磨遂渡江至魏（這野狐精。不免一場懺懺。從西過東。從東過西）帝後舉問志公（貧兒思舊債。傍人有眼）志公云。陛下還識此人否（和志公趕出國始得。好與三十棒。達磨來也）帝云。不識（却是武帝承當得達磨公案）志公云。此是觀音大士。傳佛心印（胡亂指注。臂膊不向外曲）帝悔。遂遣使去請（果然把不住。向道不唧壁）志公云。莫道陛下發使去取（東家人死。西家人助哀。也好一時趕出國）闔國人去。他亦不回（志公也好與三十棒。不知脚跟下放大光明）。

達磨遙觀此土有大乘根器。遂泛海得而來。單傳心印。開示迷塗。不立文字。直指人心。見性成佛。若恁麼見得。便有自由分。不隨一切語言轉。脫體現成。便能於後頭。與武帝對譚。并二祖安心處。自然見得。無計較情塵。一刀截斷。洒洒落落。何必更分是非。辨得辨失。雖然恁麼。能有幾人。武帝嘗披袈裟。自講放光般若經。感得天花亂墜地變黃金。辨道奉佛。詰詔天下。起寺度僧。依教修行。人謂之佛心天子。達磨初見武帝。帝問。朕起寺度僧。有何功德。磨云。無功德。早是惡水驀頭澆。若透得這箇無功德話。許爾親見達磨。且道。起寺度僧。為什麼都無功德。此意在什麼處。帝與婁約法師傳大士昭明太子。持論真俗二諦。據教中說。真諦以明非有。俗諦以明非無。真俗不二。即是聖諦第一義。此是教家極妙窮玄處。帝便拈此極則處。問達磨。如何是聖諦第一義。磨云。廓然無聖。天下衲僧跳不出。達磨與他一刀截斷。如今人多少錯會。却去弄精魂。瞪眼睛云。廓然無聖。且喜沒交涉。五祖先師嘗說。只這廓然無聖。若人透得。歸家穩坐。一等是打葛藤。不妨與他打破漆桶。達磨就中奇特。所以道。參得一句透。千句萬句一時透。自然坐得斷把得定。古人道。粉骨碎身未足酬。一句了然超百億。達磨劈頭與他一撈。多少漏逗了也。帝不省。却以人我見故。再問對朕者誰。達磨慈悲忒殺。又向道不識。直得武帝眼目定動不知落處。是何言說。到這裏有事無事。拈來即不堪。端和尚有頌云。一箭尋常落一鵬。更加一箭已相饒。直歸少室峯前坐。梁主休言更去招。復云。誰欲招。帝不契。遂潛出國。這老漢只得懺懺。渡江至魏。時魏孝明帝當位。乃此北人種族姓拓跋氏。後來方名中國。達磨至彼。亦不出見。直過少林。面壁九年。接得二祖。彼方號為壁觀婆羅門。梁武帝後問志公。公云。陛下還識此人否。帝曰。不識。且道與達磨道底。是同是別。似則也似。是則不是。人多錯會道。前來達磨是答他禪。後來武帝是對他志公。乃相識之識。且得沒交涉。當時志公恁麼問。且道作麼生祇對。何不一棒打殺。免見搽胡。武帝却供他款道不識。志公見機而作。便云。此是觀音大士。傳佛心印。帝悔遂遣使去取。好不唧壁。當時等他道此是觀音大士傳佛心印。亦好攢他出國。猶較些子。人傳。志公天監十三年化去。達磨普通元年方來。自隔七年。何故却道同時相見。此必是謬傳。據傳中所載。如今不論這事。只要知他大綱。且道達磨是觀音。志公是觀音。阿那箇是端的底觀音。既是觀音。為什麼却有兩箇。何止兩箇。成群作隊。時後魏光統律師。菩提流支三藏。與師論議。師斥相指心。而徧局之量。自不堪任。競起害心。數加毒藥。至第六度。化緣已畢。傳法得人。遂不復救。端居而逝。葬於熊耳山定林寺。後魏宋雲奉使。於葱嶺遇師手携隻履而往。武帝追憶。自撰碑文云。嗟夫。見之不見。逢之不逢。遇之不遇。今之古之。怨之恨之。復讚云。心有也。曠劫而滯凡夫。心無也。剎那而登妙覺。且道。達磨即今在什麼處。蹉過也不知。

聖諦廓然（箭過新羅。咦。何當辨的（過也。有什麼難辨）對朕者誰（再來不直半文錢。又恁麼去也）還云不識（三個四個中也。咄。因茲暗渡江（穿人鼻孔不得。却被別人穿。蒼天蒼天。好不大丈夫）豈免生荊棘（脚跟下已深數丈）闔國人追不再來（兩重公案。用追作麼。在什麼處。大丈夫志氣何在）千古萬古空相憶（換手槌胸。望空啟告）休相憶（道什麼。向鬼窟裏作活計）清風匝地有何極（果然。大小雪竇向草裏覓）師顧視左右云。這裏還有祖師麼（爾待番款那。猶作這去就）。自云有（塌薩阿勞）喚來與老僧洗脚（更與三十棒趕出。也未為分外。作這去就。猶較些子）。

且據雪竇頌此公案。一似善舞太阿劍相似。向虛空中盤礴。自然不犯鋒鋦。若是無這般手段。纔拈著便見傷鋒犯手。若是具眼者。看他一拈一撥。一褒一貶。只用四句。拈定一則公案。大凡頌古只是繞路說禪。拈古大綱據款結案而已。雪竇與他一撈。劈頭便道。聖諦廓然。何當辨的。雪竇於他初句下。著這一句。不妨奇特。且道。畢竟作麼生辨的。直饒鐵眼銅睛。也摸索不著。到這裏。以情識卜度得麼。所以雲門道。如擊石火。似閃電光。這箇些子。不落心機意識情想。等爾開口。堪作什麼。計較生時。鷄子過新羅。雪竇道。爾天下衲僧。何當辨的。對朕者誰。著箇還云不識。此是雪竇忒殺老婆。重重為人處。且道。廓然與不識。是一般兩般。若是了底人分上。不言而喻。若是未了底人。決定打作兩橛。諸方尋常皆道。雪竇重拈一遍。殊不知。四句頌盡公案了。後為慈悲之故。頌出事跡。因茲暗渡江。豈免生荊棘。達磨本來茲土。與人解粘去縛。抽釘拔楔。剷除荊棘。因何却道生荊棘。非止當時。諸人即今脚跟下。已深數丈。闔國人追不再來。千古萬古空相憶。可殺不丈夫。且道。達磨在什麼處。若見達磨。便見雪竇末後為人處。雪竇恐怕人逐情見。所以撥轉關捩子。出自己見解云。休相憶。清風匝地有何極。既休相憶。爾脚跟下事。又作麼生。雪竇道。即今箇裏匝地清風。天上天下有何所極。雪竇拈千古萬古之事。拋向面前。非止雪竇當時有何極。爾諸人分上亦有何極。他又怕人執在這裏。再著方便高聲云。這裏還有祖師麼。自云有。雪竇到這裏。不妨為人。赤心片片。又自云。喚來與老僧洗脚。太殺減人威光。當時也好。與本分手脚。且道。雪竇意在什麼處。到這裏。喚作驢則是。喚作馬則是。喚作祖師則是。如何名邈。往往喚作雪竇使祖師去也。且喜沒交涉。且道。畢竟作麼生。只許老胡知。不許老胡會。

『碧巖録』から『無門関』へ

『碧巖録』に倣って

むもんかん

『無門関』

無門慧開(1183～1260)が、自分で選んだ古則に評釈した
48則

きどうしゅう

『虚堂集』

丹霞子淳(?-1119)の頌古百則
に林泉從倫(不詳)の「評唱」
100則

しょうようろく

『従容録』

宏智正覺(1091-1157)の百頌古
に萬松行秀(1166-1246)の「示
衆」、「著語」、「評唱」
100則

へきがんろく

『碧巖録』

雪竇重顕(980-1052)の『雪竇
頌古』に圓悟克勤(1063-1135)
の「垂示」、「著語」、「評唱」
100則

...

しんえきろく

『請益録』

宏智正覺の「拈古百則」に萬松行
秀の評唱
100則

くうこくしゅう

『空谷集』

投子義青(1032-1083)の頌古百
則に林泉從倫(不詳)の「評唱」
100則

げきせつろく

『擊節録』

雪竇重顕の「拈古一百則」に圓悟
克勤の「提唱」、「著語」、「寸評」
100則

『碧巖録』から『無門関』へ

成立と中国刊行

『無門関』が三度に刊行されたが、早い時期中国に忘れられた禅籍である。



無門慧開 (1183-1260)

紹定元年（一二二八）

龍翔寺に無門慧開が
四十八則の公案を用
いて修行僧達を指導

紹定二年（一二二九）

理宗皇帝の誕生日に
合わせて刊行

淳祐五年（一二四五）

再刊

淳祐六年（一二四六）

三刊



禅思想史講義

小川 隆

春秋社

禅宗部
法眼録
無門関

土屋太祐
柳 幹康

新国訳大蔵経

中国撰述部①—6

法眼録・無門関

土屋太祐・柳幹康 訳注

貴重な語録と著名な公案集の読解

唐末五代の禅僧・法眼文益の言行を明代に集成し、従来その全容があまり知られなかった語録『法眼録』と、南宋の無門慧開が著し、日本への将来を経て今日、世界中で広く読まれるようになった公案集『無門関』を収録。

新国訳大蔵経・中国撰述部①—6(第一期第6回配本) 大蔵出版

こくぶんけんトーク

『無門関』の不思議な成功物語

後半

ダヴァン・ディディエ



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国文学研究資料館

無本覺心と『無門関』

15歳、承久三年（1221） 神宮寺で幅広い教育を受ける「頗る経史の大意を知る」（行状）。

19（29）歳、嘉禄元年（1225） 東大寺に授戒。高野山で密教を学ぶ。

33歳、仁治二年（1242） 道元に菩薩戒を受け（一年で離れる）。

41歳、寛元五年（1247） 栄西の弟子の栄朝に参じる。

43歳、建長元年（1249） 入宋。無門慧開の下に参じ、その法を継ぐ。

48歳、建長六年（1259） 帰国。無門の師である月林の語録と『無門関』を持ち帰る。
高野山の禅定院主座になる。

49歳、建長七年（1255） 高野山の金剛三昧院の住持（三年）。

52歳、正嘉二年（1258） 紀州由良荘の西方寺（興国寺）に居を定める。嗣法の香を無門に焚く。

61歳、文永五年（一二六八） 鎌倉寿福寺住持に招かれ、断る。亀山上皇に数回招待されて、全て断る。



無本覺心（1207-1298）

- 法灯派の宗祖
- 曹洞宗との繋がり
- 密教も禅も

『無門関』の知名度

刊行から見える物

近現代

近世

中世 宋代(中国)

無門関

- イ② 一卷 ③ 宋、無門慧開 宗紹編 ④ 宋、紹定元(序)刊
- ロ② 一卷 ④ 宋、紹定二(上表文) ⑦ コレヲ實際上ノ初刊ト見ル人モアル
- ハ② 一冊 ④ 宋、淳祐五(孟珙跋) 重刊 ⑦ コノ翌六年ニ禪箴ト鄭清之ノ撰ニナル第四九則ヲ加フ
- ニ② 一冊 ④ 應永一二武藏兜率山廣圓寺常牧 ⑤ 彰考、尊經
- ホ② 一冊 ④ 寫(大永五) ⑤ 松ヶ岡
- ヘ② 一冊 ④ 寫(天文五) ⑤ 内閣
- ト② 一冊 ④ 寫(天文二三) ⑤ 岩崎、大東急
- ④ 寫(弘治三) ⑤ 積翠

- チ② 一冊 ④ 寫(室町末期) ⑤ 成實、積翠
- リ② 二冊 ④ 寬永元(古活字本) 洛陽重刊 ⑤ 成實
- ヌ② 一冊 ④ 寬永二 ⑤ 正大 ⑥ 佛解辭
- ル② 一冊 ④ 寬永八(木活本) 上島左兵衛 ⑤ 松ヶ岡、岸澤
- ヲ② 一冊 ④ 寬永九京都中野市右衛門 ⑤ 駒大一四五一
- ワ② 一冊 ④ 寬文六京都村上勘兵衛
- カ② 一冊 ④ 延寶八 ⑤ 駒大一四五一W二 ⑦ 應永本ノ再刻
- ヨ② 一冊 ④ 寶曆二京都柳枝軒(或、出雲寺英太郎) ⑤ 駒大一四五一二 ⑦ 寬文六村上本ノ再刻
- タ② 一冊 ④ 鈴木太兵衛刊 ⑤ 駒大一四五三
- レ② 一冊 ④ 京都柳枝軒小川多左衛門 ⑤ 駒大一四五一W六
- ソ② 一冊 ④ 京都松月堂小川源兵衛 ⑤ 松ヶ岡
- ツ② 一冊 ④ 明治一九名古屋梶田勘助 ⑤ 京大、高大、上野、内閣、早大
- ネ② 一冊 ④ 明治三六京都貝葉書院 ⑤ 河村
- ナ② 一冊 ④ 町元吞空註 ④ 明治四三京都貝葉書院 ⑤ 駒大一四五一四 ⑦ 大正三再版(一四五一四)アリ
- ラ② 一冊 ④ 靈山實圓註 ④ 大正九和訓略解本 ② 一冊 ③ 靈山實圓註 ④ 昭和二九京東京光融館
- ム② 一冊 ③ 柴山全慶註 ④ 昭和二九京都其中堂 ⑤ 駒大一四五一三六
- ウ② 一冊 ③ 古田紹欽譯註 ④ 昭和三一東京角川書店 ⑤ 國會圖
- キ② 一冊 ⑤ 駒大禪學寶典、塗毒鼓正、正續藏二編二四ノ二、禪學大系祖錄二、國譯禪叢一一、昭新藏宗典六、大正藏四八ノ一、國譯一切諸宗六

『無門関』の知名度

刊行から見える物

駒澤大学 禅籍目録 電子版

近現代 近世 中世 中国

無門関	イ①一巻、宋、無門關、宗紹編、④宋、紹定元(序)刊、⑤宋、紹定二(上表文)、⑥コレヲ實、⑦上ノ初得ト見ルモノアル、⑧一巻、宋、淳祐五(孟瑛跋、重刊、⑨コレヲ實、⑩六年ニ譯註ノ撰ニナル、第四九期ヲ加フ、⑪一巻、宋、武康軍山廣興寺常牧、⑫一巻、宋、松岡、⑬一巻、宋、松岡、⑭一巻、宋、松岡、⑮一巻、宋、松岡、⑯一巻、宋、松岡、⑰一巻、宋、松岡、⑱一巻、宋、松岡、⑲一巻、宋、松岡、⑳一巻、宋、松岡、㉑一巻、宋、松岡、㉒一巻、宋、松岡、㉓一巻、宋、松岡、㉔一巻、宋、松岡、㉕一巻、宋、松岡、㉖一巻、宋、松岡、㉗一巻、宋、松岡、㉘一巻、宋、松岡、㉙一巻、宋、松岡、㉚一巻、宋、松岡、㉛一巻、宋、松岡、㉜一巻、宋、松岡、㉝一巻、宋、松岡、㉞一巻、宋、松岡、㉟一巻、宋、松岡、㊱一巻、宋、松岡、㊲一巻、宋、松岡、㊳一巻、宋、松岡、㊴一巻、宋、松岡、㊵一巻、宋、松岡、㊶一巻、宋、松岡、㊷一巻、宋、松岡、㊸一巻、宋、松岡、㊹一巻、宋、松岡、㊺一巻、宋、松岡、㊻一巻、宋、松岡、㊼一巻、宋、松岡、㊽一巻、宋、松岡、㊾一巻、宋、松岡、㊿一巻、宋、松岡、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、
-----	---

『無門関』

碧巖録	イ①一巻、宋、碧巖集、④宋、紹定元(序)刊、⑤宋、紹定二(上表文)、⑥コレヲ實、⑦上ノ初得ト見ルモノアル、⑧一巻、宋、淳祐五(孟瑛跋、重刊、⑨コレヲ實、⑩六年ニ譯註ノ撰ニナル、第四九期ヲ加フ、⑪一巻、宋、武康軍山廣興寺常牧、⑫一巻、宋、松岡、⑬一巻、宋、松岡、⑭一巻、宋、松岡、⑮一巻、宋、松岡、⑯一巻、宋、松岡、⑰一巻、宋、松岡、⑱一巻、宋、松岡、⑲一巻、宋、松岡、⑳一巻、宋、松岡、㉑一巻、宋、松岡、㉒一巻、宋、松岡、㉓一巻、宋、松岡、㉔一巻、宋、松岡、㉕一巻、宋、松岡、㉖一巻、宋、松岡、㉗一巻、宋、松岡、㉘一巻、宋、松岡、㉙一巻、宋、松岡、㉚一巻、宋、松岡、㉛一巻、宋、松岡、㉜一巻、宋、松岡、㉝一巻、宋、松岡、㉞一巻、宋、松岡、㉟一巻、宋、松岡、㊱一巻、宋、松岡、㊲一巻、宋、松岡、㊳一巻、宋、松岡、㊴一巻、宋、松岡、㊵一巻、宋、松岡、㊶一巻、宋、松岡、㊷一巻、宋、松岡、㊸一巻、宋、松岡、㊹一巻、宋、松岡、㊺一巻、宋、松岡、㊻一巻、宋、松岡、㊼一巻、宋、松岡、㊽一巻、宋、松岡、㊾一巻、宋、松岡、㊿一巻、宋、松岡、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、
-----	---

『碧巖録』

近世

中世

宋代(中国)

宝暦二年(一七五二)

延宝八年(一六八〇)

寛文六年(一六六六)

寛永九年(一六三二)

寛永八年(一六三一)

寛永二年(一六二五)

寛永元年(一六二四)

慶長七年(一六〇二)

応永十二年(一四〇五)

正応四年(一二九一)

淳祐六年(一二四六)

淳祐五年(一二四五)

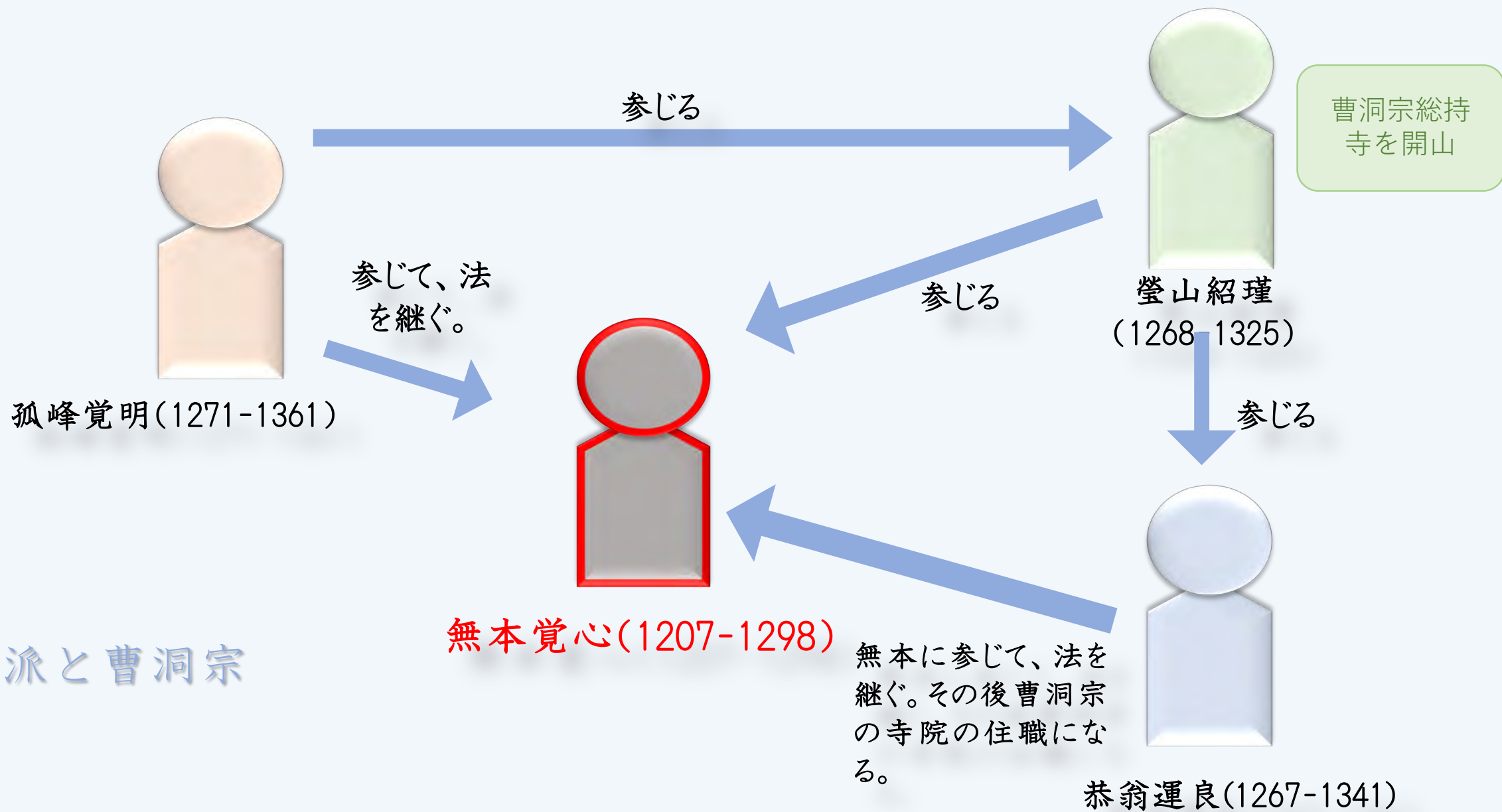
紹定二年(一二二九)

200年のブランク？

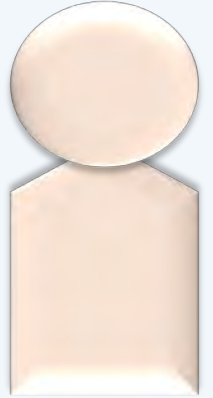
中世の『無門関』抄物

- 『梅山和尚四十八則代』
梅山聞本(曹洞宗、?ー一四一七)
- 『無門関四十八則円光禅師下語』
白崖宝生(幻住派)(一三四三ー一四一四)
- 石屋真梁(曹洞宗)(一三四五ー一四二三)下語集
- 月江正文(曹洞宗)(?ー一四六二)下語集
- 『無門関抄』川僧慧济(曹洞宗)(?ー一四七五)
最古の無門関抄物(資料自体は江戸時代の物)(如仲天闍(一三六五ー一四四〇)が『無門関』に触れていた)
- 『無門関抄』天英祥貞(曹洞宗)(?ー一五一)
一) 現存する最古の無門関抄物永正四年(一五〇七)

...



大燈国師から公案に「下語」（あぎょ）を付ける、求める修行法は公案集を実践に持ち込む。



宗峰妙超
(大燈国師、
1282-1338)

『大燈百二十則』

下語を付ける

『大燈百二十則』

趙州因僧問、狗子還有仏性也無。「舌頭已長。」云、無。
「買鐵得金。又云、逼塞虚空、又云、無孔鐵槌当擲。」

趙州、因みに僧問う：「狗子に還た仏性有り也無(や)。」
「舌頭は已に長し。」云わく、「無」。「鐵を買い、金を得。」
又云わく、虚空を逼塞す、又云わく、無孔の鐵槌を当
面に擲つ。」

下語を求める

『大燈百二十則』

五祖演云、牛過窓櫺、頭角四蹄全出、尾巴因甚出不得。
一賽兩彩。又云、牡丹花下睡猫兒。又云、若是別人出
蹄跡不得。

師問云、你道一賽兩彩、意旨如何。答云、直如絃曲如
鉤。師云、如何是直。答云、月白風清。又云、如何是曲。
答云、御前擲題。師云、畢竟道一句來。答云、演老与和
尚、披毛入火聚。師乃喝、某甲礼拝出去。

新しい公案禅と『無門関』

中世臨済宗と『無門関』関係

林下

大徳寺派
妙心寺派

『無門関』不使用
(他の公案集を使用)



幻住派
曹洞宗

『無門関』関連抄物がその使用を示している。



五山

(法灯派を含めて)

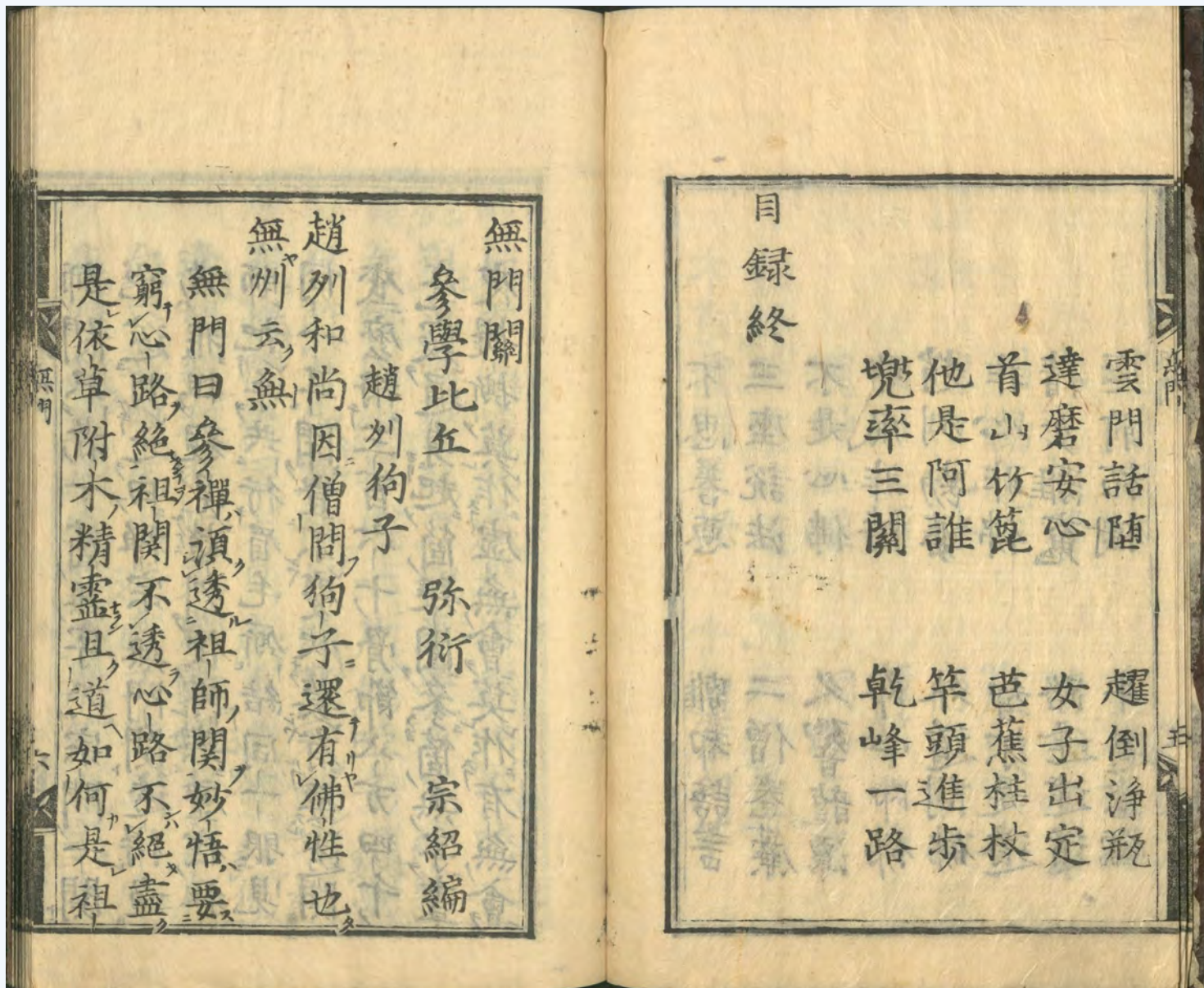


公案集を取り入れた新しい禅を使用しない。

近世に開花する『無門関』

テキストだけ

『無門関』、寛永九（1632）



校正
評註

鰐頭無門関

三、才六、号

此上什師翻名力生云云又釋氏要覽上師資篇和尚指歸云郁波弟耶此云常近此
受持又毗奈耶云郁波陀耶此云親教田能教離出世業故稱受業和尚○因僧問
因論語寧而篇因不失其親皇仰疏因親也云僧梵語具云僧伽唐言聚又南山提
云四人已上能御聖法辨得前聖名之爲僧僧以和合爲義又僧史畧云凡四人已
上名僧今丁一亦稱僧者蓋從衆名之也亦如萬有一千五百人爲軍二人亦稱軍
也詳見千釋氏要覽上○佛性佛見于前性者天台智者釋云性名不改云又釋源
諸詮都序云法義不同須善辨識者凡欲明解諸性相先須辨得法義依法解義義
即分明以義詮法法即顯著今且約世物明之譬如真金隨工匠等緣作銀銅椀蓋
種種器物且金性必不變爲銅銀金即是法不變隨緣是義設有入問說何物不變
何物隨緣只合答云金也○祖師關寶林傳云期城太守楊衍之問達磨曰西國相

承稱祖何義達磨曰明佛心宗行解相應名爲祖師○歷代歷經歷也代世也若說
文三十年爲一世是世非今意今則但取代更之說周禮太行人世相朝也注父死子
立曰世是也○眉毛厮結厮胥也義與相同大慧禪師答江給事書直候渠將來旨
要與山僧說話方始共渠眉毛厮結理會在○將三百六十骨節八万四千毫髮交
母恩重經云孩兒在懷腹
中生三百六十骨節八万
四千毛孔○提撕頭會提
說文挈也从手是聲呂氏
曰提者挈以手也又舉
也厮提撕也云言執持也
○莫作虛無會虛無老子
之道也○莫作有無會有
無外道斷常之見也無門
錄曰參禪須透祖師關妙
悟要窮心路絕祖關不透
心路不絕盡是依怙附水
精靈所以山僧尋常教兄
弟將三百六十骨節八萬
四千毫髮通身起箇疑團
參箇公案蓋要諸人透祖
師關窮心路絕只如僧問

無門関

參學比丘

弥衍

宗紹編

曰趙州狗子

趙州和尚因僧問狗子還有佛性也
無州云無

無門曰參禪須透祖師關妙悟要
窮心路絕祖關不透心路不絕盡
是依草附木精靈且道如何是祖
師關只者一箇無字乃宗門一關

近世に開花する『無門関』

読んで分かる『無門関』

『禅宗無門関』、寛永二年（1625）

註云一切衆生悉有佛性トミレハ有情非情共ニ此ノ佛性ヲ具足セスト云フナキナリ此ノ僧毛如是ク旨ヲ引受テ庭前ノ狗子ニ因テ人々ノ佛性ヲ問ナリ趙州ハ本分ノ作家ニ胸懷如虚谷ナル故ニ無ト云語ニ和ノ不覺無ト吐出スル也扱テ佛性露顯テハナイカ此ノ答處ヲ無佛性トラセラレタト聞テハ散々ナルフ也有無無ニアラス本無吐出也

不思善惡

離却語言

禅宗無門関卷之上

參學比丘

趙州狗子

彌衍宗紹 編

趙州和尚曰僧問狗子還有佛性也無州云無

註云一切衆生悉有佛性トミレハ有情非情共ニ此ノ佛性ヲ具足セスト云フナキナリ此ノ僧毛如是ク旨ヲ引受テ庭前ノ狗子ニ因テ人々ノ佛性ヲ問ナリ趙州ハ本分ノ作家ニ胸懷如虚谷ナル故ニ無ト云語ニ和ノ不覺無ト吐出スル也扱テ佛性露顯テハナイカ此ノ答處ヲ無佛性トラセラレタト聞テハ散々ナルフ也有無無ニアラス本無吐出也

無門云參禪須透祖師関妙悟要窮心路絶祖關不透心路不絶盡是依草附木精靈且道如何是祖師関只者一

『無門関万安抄』、寛永十四年(1637)

趙列勘婆	外道問佛
非心非佛	智不是道
倩女離魂	路逢達道
庭前栢樹	牛過窓櫺
雲門話墮	耀倒淨瓶
達磨安心	女子出定
首山竹篋	芭蕉拄杖
他是阿誰	竿頭進步
兜率三關	乾峯一路
目錄終	

無門関

參學比丘

趙列狗子

弥衍

宗紹編

趙列和尚因僧問狗子還有佛性也無列云無

趙列和尚一此僧一切衆生悉有佛性ナト云經文ナト

聞挾テアノ狗子ニモ佛性ハゴヤアラスカト問タ此僧仏性

シ不審故也列云無鑊鑊子ナ何トモ手カ著ヌ此答

詰ナトラ兔ノ角ノト解會スルハ散ケナフソヤ去手カ著ヌ

トハカリ心得テ置クフテハ無イソ至極ノ理ナヤニ依テ手カ

著ケラヌソ只自知テハソ廿年廿年疑著スル云ハ爰イソ

此ヲ則ラサヘ會シタラハ一千七百則シモ尽クシセシ一則ラ能

ク會ヒヌニ依テト古則モ未徹ソ今時參禪スル人ヲ見シ

或ハ十則此則或ハ百則二百則參シタナトイヘトモ心ハ一字

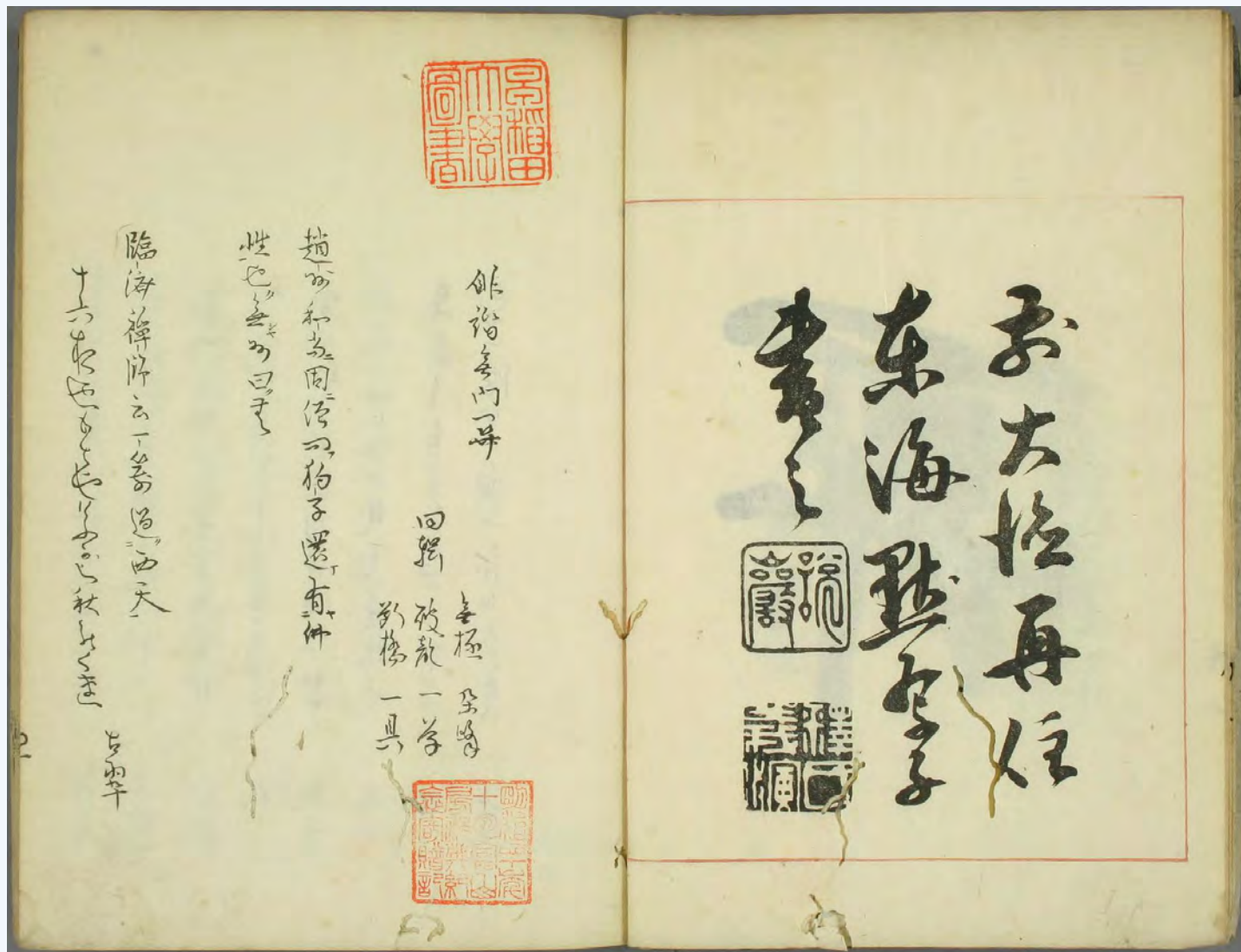
ヲ知ヌ者ニハガリソ夫ハ言句ヲ專ラトシ解會ヲ是トスルニ

近世日本社会に入ってくる『無門関』

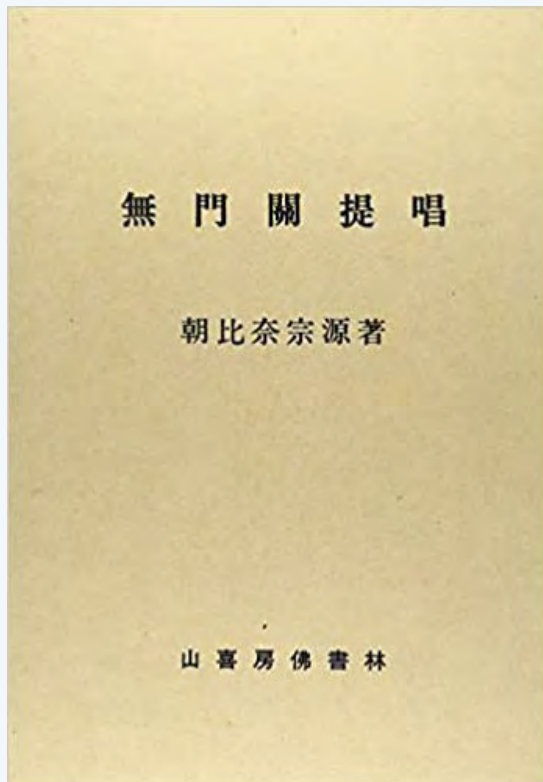
慶応二年(1849)から「雑学事件」曹洞宗は『無門関』を排除する。



朶峰、嘉永4(1851)

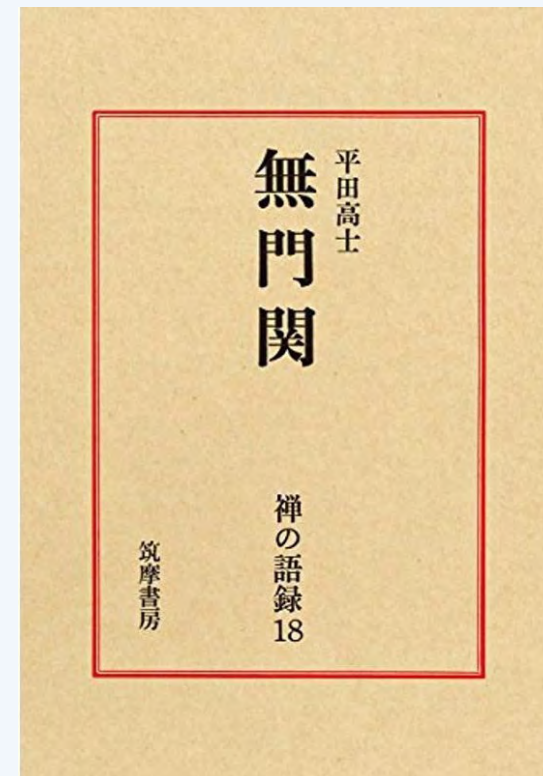


無門関は古くから臨済録、碧巖録と共に、最も広くわが宗に行われた書物である。

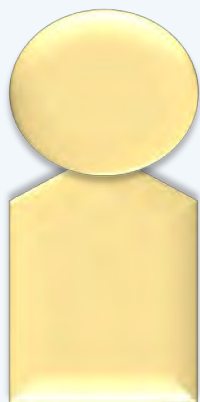


『無門関提唱』、朝比奈宗源、1957

禪の祖録の読み方は人によっていろいろあるであろうが、大別すると二つの方法が考えられる。一つは実践的な読み方であり、他は学問的な読み方である。(中略)従来の禪者たちの祖録の読み方は、主として実践的な読み方であり、むしろ学問的な読み方は真の祖録の読み方ではないとして閑却される傾向であったといってよい。しかし、「確実性」を尊ぶ科学的現代社会に在つては、すでに禪の祖録といえども学問的な読み方を不聞に付しておくことは許されなくなってきた。単なる実践的な読み方だけでは「独りよがり」やドグマに陥ってしまう恐れがある。もちろん、実践的な読み方を全く欠いてしまつては、単なる学問的興味の対象となつてしまふ。それはおよそ祖録を作つた禪の祖師たちの意に反することとなるであらう。『無門関』を讀むにあつては、この祖録の二つの読み方はそのどちらを欠くこともできないのである。



『禪の語録 18 無門関』、1969



釈宗演、『無門関講義』、1909

無(む)とは無(ない)と云うふ字であるが、そんな
ら、無いと云ふ事か。有無の無か、斷無の無かど
ういふ無字であろう。菩提とか涅槃とか云つて
もいかぬ。佛陀とか、ゴッドとか、云つてもいかぬ。

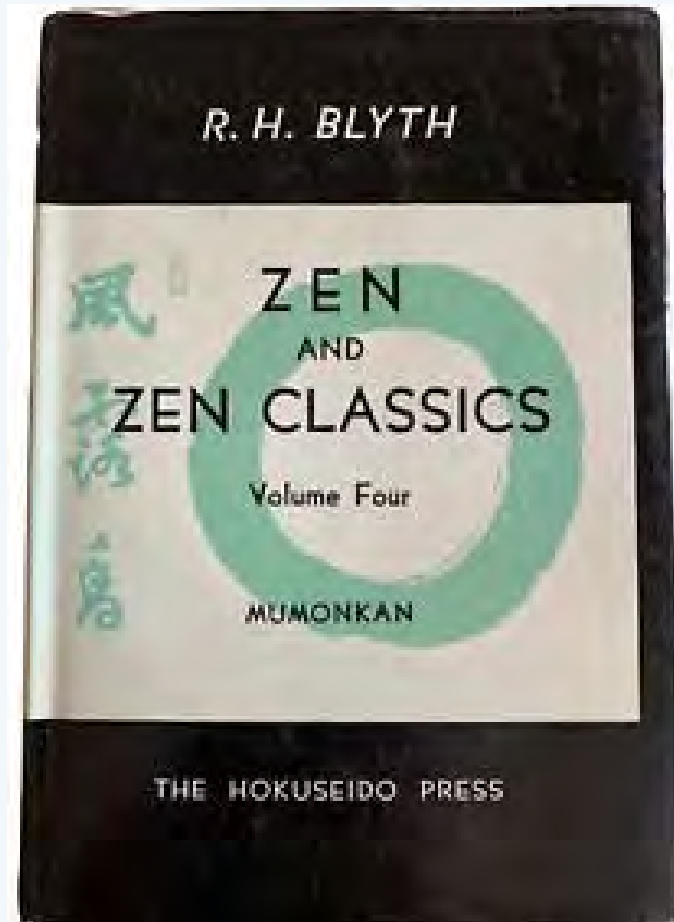
「州云く、無」と、サーこぢや。趙州、和尚ス力
サズ「露刃劍」を引き抜いたぞ。油斷をするなよ



南天棒、中原鄧州(1839-1925)

『南天棒無門関提唱』、1928

世界的な禅籍の『無門関』



レジナルド・ブライス
Reginald Blyth
(1898-1964)

Zen And Zen Classics Vol. 4: Mumonkan, 1966

ご清聴ありがとうございます